

OB 通信

鳳 翩

= 2024年 12月号 =



【萩市東光寺（毛利家奇数代の藩主の墓を臨む）】

山口大学ワンダーフォーゲル部 OB 会

鳳翩会

もくじ

				ページ
1	会長挨拶	鳳翔会会長	田村 伊正	1
2	総会報告	鳳翔会副会長	三國 彰	2
3	OB 総会報告	東京支部 事務局長	秋山 高弘	8
4	支部報告			
	東京支部 活動報告	東京支部 事務局長	秋山 高弘	13
	山口支部 活動報告	山口支部 支部長	坂田 信一	14
	九州支部 活動報告	九州支部 支部長	堀 剛	15
5	現役報告	人文学部 4年	緒方若菜	17
6	同期会だより			
	S54同期会 夏の新穂高温泉	東京支部 S54 工	木下 嘉郎	19
7	エッセイ			
	広島県/島根県 最高峰 恐羅漢山	関西支部 S48 経済	上田 功	21
	遙かなるイースター島	山口支部 S52 経済	古谷 眞之助	22
	旧東海道徒歩旅行	関西支部 S51 工	池田 純	24
	ふるさとの山、皿倉山に登る	東京支部 S50 経済	塩塚 保	25
	西田圭吾君 逝去のご報告	山口支部 S60 農	齊藤 昌彦	27
	テン場	九州支部 S57 経済	堀 剛	28
	私のお昼休み	山口支部 S59 経済	平野 展康	29
8	近況報告			
	ひざ痛に思う	九州支部 S54 文理	桑名 保子	30
	「私の近況報告」偶然？それとも奇跡？	東京支部 S47 工	福永 俊美	31
	富士山の宝永山登山顛末記	東京支部 S47 文理	恵谷 浩	32
	「私の近況報告」奥多摩の寒山寺	東京支部 S47 工	福永 俊美	33
	養老溪谷・栗又の滝における納涼	東京支部 S47 文理	恵谷 浩	34
9	OB の皆さまへのお願い	副会長	S55 工 三國 彰	35
10	2024年度本部・支部役員連絡先	会長	S53 工 田村 伊正	36
	編集後記	副会長	S57 工 田原 宏	36

1. 会長挨拶

鳳翔会会長 S53年 工学部卒 田村 伊正

年の瀬を迎え、何かと忙しい時期になりましたが、鳳翔会の会員の皆様におかれましては益々ご清栄のこととお喜び申し上げます。また、鳳翔会の運営への多大なご支援とご協力を頂き厚くお礼申し上げます。

今年10月25日に開催されました東京支部の引き受けによる総会は、城戸支部長を初め多くの東京支部の皆様のご尽力のお蔭をもちまして、滞りなく終えることができました。会場の地となりました東京都青梅市の「清流の宿 おくたま路」は自然豊かな観光スポットも多く、御岳山登山や溪谷散策に会員の皆さんも楽しんで頂けたことと存じます。アフター・コロナの会員活動を模索する中で、会員相互の親睦を持続すべく、経費節減や開催地の選定に工夫を頂きました東京支部の皆様、そしてご参加いただいた会員の皆様に、改めて感謝申し上げます。

総会では、城戸議長に議題のご審議をお諮り頂き、全てのご承認を頂きました。詳細な審議経過につきましては後述しますが、執行部から今後の運営費の節減に向けての課題を説明させていただき、出席者の皆様からのご意見もいただきました。追加議案として、来季の予算計画も控えていますので、出来ることを本支部役員の方々に承認を頂きながら具体的に実施していけるよう執行部への一任を頂きました。予算の管理に努めていただいています役員にはご苦勞をお掛けしていますが、報われた思いでホッとしたところです。

この度の総会では、東京支部の取り組みとして、宿泊費の安い平日の設定、宿泊を楽しめる温泉と安価でありながら満足度の高い懇親会場の確保、小林氏による紙資料の節約とプロジェクター利用や写真データのネット配布等、様々な工夫をしていただきました。

総会を引き受けていただく各支部は会員の高齢化と減少の共通した課題を抱えていることと思いますが、東京支部の取り組みも参考にしながら、引き続き工夫し改善していければと存じます。皆様のご期待に添えますよう課題解決に取り組んで参りますので、引き続きご指導ご鞭撻のほど宜しくお願いします。

新たな期を迎えるにあたりましては、3つの課題の解決に取り組むたいと考えています。少子高齢化が進む社会環境にあって、同様の課題を抱えるOB会の本部、支部が連携を図りながら課題解決の努力が出来ればと思います。

① 安定した財政の確保

新たなシニア層と若年層の会員数の増強を図り、安定した会費収入を図りながら、夏号会誌の電子化を推進し支出を抑制したい。

現役支援金の確保。

② 持続可能な本部・支部運営組織創り

本部役員と山口支部役員の親和性を高め、持続可能な役員体制の構築に努めたい。

各支部地域に居住する若齢卒業生の連絡情報の支部への提供。

③ 現役部員との交流促進

総会への現役参加を促し、OB会活動への理解を高め会員加入を促す。

特に山口支部ならではの現役との交流機会を増やし、山口支部引き受けの令和7年度総会を盛り上げたい。

令和7年の秋の総会は山口支部が引き受けて頂くことになりました。会員の皆様には是非ご参加いただきますようお願い致します。今年も大規模な震災や異常気象による災害が多く発生しましたが、来年は平穏な年であってほしいと願っております。皆様には良いお年をお迎えされますようご祈念致します。

2. 総会報告

鳳翔会副会長 S55年 工学部卒 三國 彰

令和6年度 YUWVOB 会（鳳翔会）総会が、下記のとおり開催されましたのでご報告します。

- 1 日時 2024年10月25日（金）～26日（土）
- 2 場所 おくたま路（東京都青梅市二俣尾 2-371）
- 3 議事

今年度総会においては以下のような議案が提出され、討議の結果、それぞれの議案は賛成多数により承認されました。

第1号議案 2023年度事業状況報告および会計決算報告と監査報告

令和5年度（2023年1月1日～2023年12月31日）の事業報告について三國副会長から以下の報告があった。

新型コロナウイルス感染症対策の規制緩和により、活動も再開される方向となりました。OB 総会も関西支部の皆様様の用意周到な準備のおかげで無事開催されました。また OB 通信も2回発行することができました。

【2023年度事業状況報告】

(1) 山口大学ワンダーフォーゲル部に対する支援

- 1 卒部生歓送会への記念品のみとし、激励訪問は中止
- 2 現役支援金の授与、海浜合宿の支援（支援金の授与）

(2) 役員会等の開催

役員会（WEB 会議）にて総会の実施方針を決定し、OB 通信発刊の計画を立てました。

- 1) 役員会 2 回（1 月 29 日、6 月 6 日 Web 会議）
- 2) 本部役員・支部長会議（6 月 19 日：Web 会議）
会誌の発刊計画、総会の実施方針等についての協議
- 3) 2023 年度会計監査 2023 年 1 月 28 日監査役：斎藤昌彦、平野展康

(3) 2023 年総会を関西支部で実施

1) 総会

日時 2023 年 10 月 21 日（土）～22 日（日）
場所 湯の花温泉 溪山閣（京都府亀岡市ひえ田野町佐伯下峠 20-6）
参加人数 総会 57 名、懇親会 57 名（現役 2 名含む）

2) 総会における支援

総会開催支部支援金、
現役への総会参加要請および参加支援

(4) 「OB 通信（会誌）の発行

8 月号、12 月号の発行

(5) 山口大学ワンダーフォーゲル部に対する支援

現役の活動も、昨年に引き続き海浜合宿と夏合宿の開催が決定しました。活発化されてきた現役の部活支援のために支援金を贈呈しました。

なお山口支部の活動（防府市右田ヶ岳ハイキング）参加を呼びかけました。現役部員 5 名の参加があり、交流を深めることができました。

【2023年度会計決算報告および会計監査報告】

まず、令和5年度収支計算書についてご報告いたします。収支決算書をご参照ください。2023年入金会費33,000円と2023年預り金会費振替323,000円、寄付金6,760円で収入の部合計は362,760円です。今年度も追いコンは中止となりましたが、卒部生に記念品を渡しています。支出の部はOB通信関連経費(8月号、12月号)、総会費用、その他の経費で合計524,658円となります。従って2023年収支はマイナス161,898円となります。前年度繰り越し剰余金は745,690円であり、当年収支により翌年度繰り越し金は583,792円となります。

収支計算書(2023年1月1日~12月31日)

鳳翔会

(単位:円)

		比率
収入の部		
寄付金(S57)	6760	
2022入金会費	33,000	
2022年預り金振替	323,000	
	<u>収入の部合計</u>	100%
支出の部		
【OB通信8月号関連】		
1) OB通信印刷代	89,265	
2) 葉書代	13,395	
3) 封筒、コピー、用紙、タックシール代等	4,461	
3) 郵送代	41,160	
4) OB通信発送協力費	<u>3,200</u>	
	小計	151,481 41.8%
【OB通信12月号関連】		
1) OB通信印刷代	76,065	
2) 封筒、コピー、用紙、タックシール代等	6,485	
3) 郵送代	<u>40,950</u>	
	小計	123,500 34.0%
【OB総会】		
1) 総会支援金	60,000	
2) 学生参加補助	<u>54,160</u>	
	小計	114,160 31.5%
【その他】		
1) 会計監査参加助成金	1,600	
2) 記念品代	38,610	
3) ホームページ運営費	5,307	
4) 事務局費	10,000	
5) 現役支援金	50,000	
6) 海浜合宿支援金	<u>30,000</u>	
	小計	135,517 37.4%
	<u>支出の部合計</u>	524,658 144.6%
収支		
	<u>2019年収支</u>	<u>-161,898</u> -44.6%
剰余金		
	<u>前年度繰り越し</u>	<u>745,690</u>
	<u>翌年度繰り越し</u>	<u>583,792</u>

次に、2023年12月31日現在の貸借対照表についてご報告いたします。貸借対照表をご参照ください。預金の期首残高1,733,690円です。当年入金会費等の増加450,760円、当年経費支出等による減少524,658円で、預金の期末残高は1,659,792円となります。(広島貯金事務センター振替受払通知表 39号(令和5年12月28日)の現在高と一致) 会費預り金の期首残高 988,000円、当年会費入金450,760円、当年会費への振替362,760円であり、会費預り金の期末残高は1,076,000円となります。なお、会費預り金1,076,000円の2024年以降の内訳は期末残高のとおりとなります。剰余金の期首残高は745,690円、当年の収支はマイナス161,898円であり、剰余金の期末残高(翌年度繰越金)は583,792円となります。以上から負債及び剰余金を合計した期末残高は1,659,792円となります。

貸借対照表(2023年12月31日現在)

鳳嗣会
(単位:円)

	科 目	期首残高	当 年		期末残高
			増加	減少	
資 産 の 部	現金	0	0	0	0
	預金				
	広島郵便貯金センター	1,733,690	450,760	524,658	1,659,792
	預金計	1,733,690	450,760	524,658	1,659,792
資産合計		1,733,690	450,760	524,658	1,659,792
負 債 の 部	未払費用	0	0	0	0
	会費預り金				
	2023年	323,000	33,000	362,760	0
	2024年	228,000	98,000		326,000
	2025年	170,000	77,000		247,000
	2026年	124,000	69,000		193,000
	2027年	63,000	62,000		125,000
	2028年	25,000	52,000		77,000
	2029年	19,000	14,000		33,000
	2030年	17,000	10,000		27,000
	2031年	11,000	10,000		21,000
	2032年	6,000	7,000		13,000
	2033年	2,000	6,000		8,000
	2034年	0	4,000		4,000
	2035年	0	2,000		2,000
	2036年	0	0		0
2037年	0	0		0	
寄付金等	0	6,760	0	0	
会費預り金計	988,000	450,760	362,760	1,076,000	
負債合計		988,000	450,760	362,760	1,076,000
剰余金 剰余金		745,690	-161,898	0	583,792
負債及び剰余金合計		1,733,690	288,862	362,760	1,659,792

振替受払通知票 01530-0- 16050 令和 5年12月28日
T5010001112730 ゆうちょ銀行 広島 貯金事務センター

通知番号及び越高		39号	1,655,792円
受 入 常 入 れ	払込金(一般)	口	
	払込金(新振票)	2	4,000
	払込金(DT)		
	払込金(MT)		
	振替受入れ		
	公金払込み		
	自動払込み		
	その他受入金		
	電 払 込 金		
	振替受入れ		
払 出 常 出 し	現金払出し		
	振替払出し		
	簡 易 払		
	その他払出金		
	電 現金払出し		
	振替払出し		
	加入者即時払		
	小切手払渡し		
料 金			
現 在 高			1,659,792

料 金 内 訳	
払込料金	円
払出料金	
振替料金	
その他料金	
税込10%計	
内税10%	
非課税料金	

小 切 手 番 号	

明細番号	始番号	終番号
電 信 受		
電 信 払		

次に平野監査役より以下の報告があった。

「令和6年2月10日、監査平野展康と日野耕二は、令和5年度の会計帳簿、経費支出何兼経費支出報告書と会計決算報告書の提出を受け、会計監査をおこないました。その結果は監査報告書のとおりであり、当年の収支計算及び期末現在の財産状況は適正であることを確認しました。」

監査報告書

1. 監査実施年月日

令和6年 2月10日（土）

2. 監査の場所

やまぐち県民活動支援センター 交流ルーム

3. 監査に立ち会った者

鳳翔会 副会長 三國 彰

鳳翔会 事務局長 坂本 新

鳳翔会 新事務局長 木村 幸誠

- 4 監査平野展康並びに日野耕二は、鳳翔会令和5年度収支決算書の提出を受け、各帳簿、証拠書類について、監査を行った結果、適正に処理されていることを認めた。

令和6年 2月10日

鳳翔会

監査員

日野耕二 
平野展康 

第2号議案 2024年度事業実施（予定）報告および事業予算案

令和6の事業実施（予定）報告および事業予算案について三國副会長より報告があった。

【2024年度事業計画】

新型コロナウイルス感染症対策規制緩和により、活動も通常通り再開される方向となりました。令和6年度も総会開催予定であり、総会支援を行う予定です。またOB通信も2回発送予定です。現役学生の活動も活発化してきており、積極的な支援を行う予定です。

① 令和6年度上期事業経緯報告

(1) 山口大学ワンダーフォーゲル部に対する支援

- 1) コロナ渦で中止されていた卒部生歓送会（追いコンに合流；3月5日）を5年ぶりに実施し、卒部生に記念品を贈呈
- 2) 現役支援金（装備費や活動援助金として）の授与

(2) 役員会等の開催

- 1) 2023年度会計監査 2024年2月10日に実施 監査役：日野耕二、平野展康
- 2) 本部・山口支部会議（3月5日 卒部生歓送会前に実施 会誌、総会についての打ち合わせを行った。

(3) 2024年総会の実施決定

2024年総会を東京支部で開催予定

（開催日時；2024年 10月25～26日

開催場所；「清流の宿 おくたま路」 東京都青梅市二俣尾 2-371

（<https://www.tokyo-okutamaji.jp/>）

② 令和6年度下期の事業予定

(1) 総会における支援

- 1) 総会支援金の進呈予定
- 2) 現役への総会参加要請および参加支援予定

(2) 「OB通信（会誌）の発行

- 1) 8月号の発刊（8月10日に発送）、OB会計の予算削減についての協議
- 2) 12月号の発刊

(3) 山口大学ワンダーフォーゲル部の活動に対する支援

令和6年度は現役部員の入部は22名、学生の活動も活発化してきています。合宿（8月に2パーティ計画）他の活動に加え、7、8月に2回の海浜合宿も開催されました。引き続き活発化してきている学生への支援を行う予定にしています。

- 1) 海浜合宿の支援（海浜合宿支援金の授与）
- 2) 支部活動への参加要請、交流促進

【事業予算案について】

令和6年9月30日における会計の入出金状況と今後の支出見込みについて報告します。

2024年OB会会計中間報告(9/30)

1. 入金

2024年会費預り金振替	326,000	
2024年入金会費	20,000	
合計	346,000	

2. 支出

(1) 既支出金		(内訳)
2024年OB通信8月号関連	108,367	
OB通信印刷代		62,700
葉書代		12,765
封筒、用紙、タックシール代		2,682
郵送代		27,020
送付作業協力金(学生)		3,200
その他	98,195	
会計監査参加金(学生)		3,200
記念品代		4,995
事務局費		10,000
現役支援金		50,000
海浜合宿助成費(萩)		30,000
小計	206,562	
(2) 今後の支出見込金(概算)		(備考)
ホームページ運営費	5,307	
総会支援金(東京支部へ)	60,000	
総会(OB参加支援; 2名)	32,000	片道旅費
総会(現役参加支援; 2名)	94,000	旅費+宿泊費
OB通信12月号発行経費	100,000	
小計	286,000	
合計	492,562	

3. 差し引き残高見込

入金	346,000	
支出	492,562	
収支	▲ 146,562	

4. 繰越金見込

前年度繰り越し金	583,792
今年度収支見込	▲ 146,562
次年度繰り越し金見込	437,230

第3号議案 令和7年秋季総会の開催について

城戸議長より2026年秋季の総会開催地について、山口支部での開催引き受けの打診がなされ、坂田支部長が引き受けを表明し、以下の内容を説明しました。

日時：2025年10月25(土)～26日(日)

場所：萩市「萩焼の宿」千春楽

城戸議長より審議が諮られ、山口支部での開催と日程及び場所について承認されました。

その他

- OB会誌の寄稿募集要項について
田村会長より会誌「鳳翺2024年12月号」の募集要項については田原副会長から後日、各支部長宛て報告致しますと報告がありました。
- 歳出削減について
三國副部長から歳出削減の案についての説明と今後の予定についての報告がありました。

3. OB 総会報告

2024 年 東京支部でのOB 総会報告

東京支部 事務局長 S.53 年 経済学部卒 秋山高弘

10月25日(金)・26日(土)と、初の平日開催となるOB 総会を、青梅市の「おくたま路」を貸切りで開催いたしました。会費の関係から平日開催とさせていただいた経緯は、OB 通信(2023年12月号)に掲載させて頂きましたが、平日にもかかわらず大勢(57名)ご参加いただき誠にありがとうございました。他のお客様に気兼ねすることなく、美味しい料理やお酒で懇親を深め、また温泉や近郊の自然を楽しんでいただくことが出来、準備した支部のメンバー一同ほっとしております。参加者の皆さまご協力ありがとうございました。以下に総会のご報告をいたします。

1. 準備状況

2022 年秋頃	総会に向けて会場候補を調査・検討
2023 年春頃	奥多摩近郊のホテル「おくたま路」の貸切りプランを候補とする 幹部にて下見を行い、仮申し込みを行う
6 月	OB 会本部・支部幹部会議にて、概要説明し平日開催の同意をとる
夏以降	東京支部の行事として、奥多摩近郊の下見(溪流散策や近隣の山登山)を実施
2024 年 春	支部の中で、総会当日の係(担当)を募集し決定
6 月	係(担当)による事前打ち合わせ会 係毎の詳細な行動要領を作成し、皆で意見を出し合い確認
9 月	人数が確定し、会費決定、ホテルやOB 会本部と最終打合せ
10 月	OB 総会(本番)実施

まずは会場を決めて押さえることが一番重要と考え早く動きました。その結果平日開催や貸切りプランの採用など固まって行きました。また支部の行事として、奥多摩に集中して活動を行ってきたことで、暑い夏場の下見が不要になりました。更に係(担当)毎の行動要領を皆で確認し意見を出し合った結果、ペーパレス化や参加者の写真共有方法採用などの新たな施策が可能となりました。

2. 総会 (会場：青梅市 清流の宿おくたま路、参加者：57名、会費：16千円/人)

15:00 受付開始

17:00 総会(会議室)、終了後写真撮影

18:00 懇親会開始 司会長谷雄さん 城戸支部長歓迎挨拶、支部参加最年長 吉永さんの乾杯音頭、各支部活動報告、現役学生 木村さん・緒方さん挨拶
幸西ワイン(S.55年工学部卒幸西義治さん)、清酒金鳳(S.55年経済卒山本剛士さん)堪能

20:00 二次会(会議室) 冒頭スクリーン映像にて「山の歌」合唱

22:00 二次会終了 片付け

翌日

7:30 全員で朝食

8:30 御岳山登山組出発

9:30 御獄渓谷散策組出発

10:00 最終チェックアウト

貸切りでしたので、他のお客様に気兼ねすることなく、懇親会、二次会共に大いに盛り上がりました。また、時間厳守、後片付けの徹底などは、さすがワングル! 宿の方から感心・感謝されました。

(全体集合写真)



3. エンジョイプラン報告 (各プラン引率リーダーから報告します)

(1) 「Aプラン実施報告」

東京支部 S54年 工学部卒 木下 嘉郎

10月25日(金) 御岳山へ往復ケーブルカー利用の登山プラン

当日は朝から電車の乱れがあり、御嶽駅12:00集合に間に合わない方が3名ほどおられました。案内係のうち長谷雄君に駅に残ってもらい、他の参加者は予定通り出発しました。

あいにくの天気でしたが逆に一般の登山客は少なく、バス、ケーブルカーもスムーズに乗れました。登山と言っても、ケーブル山上駅から整備された参道を御嶽神社まで約30分歩くだけの行程ですが、意外と上りがしんどいです。残念ながら景色は霧と小雨で期待できませんでした。

のんびりと山頂の神社迄上りましたら、ほどなく長谷雄君引率の後発組も追いつきました。無事?16名が山頂(神社)に着き、お参りすることができました。

記念写真を撮ったら、あとは下山して皆が待つ会場ホテルへ向かうだけです。予定通り16時前に清流の宿「おくたま路」に着くことが出来ました。

(A プラン写真)



(2) 「Cプラン実施報告」

東京支部 S56年 経済学部卒 武田 健治

10月26日(土) 御岳山登山 (徒歩またはケーブル利用に分かれての登山プラン)

8:30 過ぎ 当日参加1名を加え9名でホテルを出発。前日の酔いを醒ましつつ石神駅に向う。御嶽駅でバスに乗換えケーブルカー滝本駅へ。バスは前日と違い超満員すし詰め状態。

滝本駅で徒歩組(城戸さん、池田さん、武田さん、堀さん、長谷雄さん)とケーブルカー組(足立さん、木下さん、桑江さん、堀氏奥さん)は分かれ、武蔵御嶽神社に向けそれぞれ出発する。

9:45 徒歩組は鬱蒼とした杉の大木に挟まれた林道をゆっくり登る。始めは単調で急な登りが続く。しばらく行くと別組が乗ったケーブルカーに抜かれる。林道は所々平坦なところもあるが展望はなく単調さには変わりがない。杉の大木には付された続きの番号が減っていくのと昔の名所の逸話が書かれた立札が励みになった。当初700番台だった番号が100番以下になると周りも明るくなりようやく林道も終点となり、御嶽ビジターセンターの横に出る。

宿坊、御師集落を抜け国指定天然記念物の神代ケヤキを横目で見て大鳥居に着く。ここから石段の参道。両側には寄進の石柱、〇〇講の記念碑が並ぶ。関東一円から信仰を集めた神社だったことがわかる。途中工

事中のところもあったが 11:00 過ぎに武蔵御嶽神社に到着。ケーブルカー組は少し前に着き一息ついて
いるところであった。神社前で全員の写真撮影。神社奥に回りそれぞれが奥の院遥拝所から奥の院を拝む。

帰りはまた2手に分かれそれぞれが御嶽駅を目指す。徒歩組はもと来た林道を通りケーブル下滝本駅から
さらに徒歩で御嶽駅まで行く。城戸さん、長谷雄さんは早く、池田さんは中間、武田さんと堀さんはだいぶ
離される。それでも5人は疲れも見せず完歩。さすがはワングル、年はとってても元気だった。しばらくして
ケーブルカー組が到着。全員無事を確認し14:00 解散した。

(C プラン写真)



(3) 「Bプラン・Dプラン実施報告」

10月25日(金)・26日(土) 御嶽渓谷散策プラン

東京支部 S49年 工学部卒 高田哲生

総会初日の2024年10月25日の午後と翌日の26日に行った御嶽渓谷散策を報告します。
初日10数人、2日目は20数人という参加者で、約1時間のハイキングを楽しみました。
今年はいつまでも続く暑さのせいで、紅葉は始まったばかりという景色でしたが、御嶽駅からの溪流沿いの
道は歩きやすく、途中、ラフティングというゴムボートがしぶきを上げながら川下りをする風景や、道沿いの
民家のお花などを観賞しながらの行程で、皆さん満足された様子でした。

終点は、造り酒屋の澤乃井清流ガーデンで、ゆっくり飲むことが出来ました。今回は、Mさんが、散策途
中で財布を落としたと言って、バタバタしましたが、夕方交番に届けられていて戻ってきました。
まさに奇跡的なハプニングでした。

(10月25日 Bプランの写真)



(10月26日 Dプランの写真)



以上で、東京支部からのOB 総会の報告を終わります。
参加者の皆さん、遠路はるばるお越しいただき誠にありがとうございました。

以上

4. 支部報告

「東京支部 活動報告」

東京支部 事務局長 S53年 経済学部卒 秋山高弘

12月6日（金）に、支部の忘年会兼OB 総会の打ち上げを行いました。

当日は22名が集まり、夜景を楽しみながら料理とお酒を堪能しました。東京支部では永らく、城戸支部長、高田副支部長、秋山事務局長の体制で活動してきましたが、今OB 総会も一段落したことから、体制を一新し、新たに小林支部長（S.51 工学部卒）、小関事務局長（S.55 工学部卒）が選出され、挨拶がありました。当日の懇親の写真を以下に掲示します。



山口支部活動報告

山口支部 支部長 S57年 理学部卒 坂田信一

1. 2024年8月10日 OB通信送付作業

出席者9名：[田中（S47 農）、古谷（S52 経）田村（S53 工）、三國（S55 工）、田原（S57 工）、平野（S59 経）、齋藤（S60 農）、木村（現役-事務局長）、緒方（現役-部長）]

場所：山口市 ぱるとぴあ山口（防長青年館）

8月10日「やまぐち県民活動支援センター」においてOB通信の送付作業を行いました。現役の事務局長（4年）と主将（3年）も参加してくれました。現役が手伝ってくれるなんてOBとしては嬉しい限りです。送付作業後にOB会の予算削減について参加者で協議しました。（皆さん削減案には賛成でしたが総会で提案するには過去のデータが必要という意見があったので過去の状況を把握することにしました。（資料がそろったらWEB会議を行う予定でしたが、総会までに間に合わなかったため総会で状況報告をし、今後、総会での承認を行うためにWEB会議（役員会議）を行う事にしました。）



2. 2024年10月20日 支部交流会「ハイキングとバーベキュー」

出席者5名：古谷（S52 経）、古谷（S52 文理）、坂田（S57 理）、日野（S58 経）、平野（S59 経）

場所：山口市秋穂 千坊川砂防公園キャンプ場

今回のイベントは、通常の山登りから少し趣向を変えてみました。キャンプ場にベースサイトを設けて、その周辺の山に各自で登ってもらって、コアタイムにBBQを行うというイベントです。朝の9時半くらいに、テントサイトにタープを張って、BBQコンロで炭を燃やして、テーブルと椅子をおいて、立派なベースサイト設営しました。13時からベースサイトでBBQをして楽しく1日を過ごすことができました。と書いたものの、実際には、全員がベースサイトで話をし、食事をして、周辺の山には行きませんでした。話が楽しくてBBQの時間が長くなったことが原因です。頭の中に描いたような山登りとベースサイトの関係にはなりませんでした。企画とベースサイトは立派だったので、来年も同じ企画をやる価値はあると思いました。来年こそは・・・。



OB通信8月号以降の活動を報告いたします。

★2024年7月27日(土) 暑気払い 博多つつじ庵にて

★参加者 17名

今年の夏も暑かったですね！温暖化の影響でしょうか玄界灘の漁獲量も減少しているとのことで心配です。いつもの「大名つつじ庵」から「博多つつじ庵」に微妙に場所を変えての開催でしたが、豊富な飲み放題メニューに、盛況な開催となりました。

★2024年9月14日(土)～17日(火) 八ヶ岳(山中二泊三日)登山

★参加者 8名

当初は一部のメンバーで個人的に行くつもりでしたが、九州支部長を拝命したことから、どうせ行くのなら皆誘っちゃえと支部の活動予定に加えたところ、けっこうな参加者となりました。

コースは美濃戸口～(文三郎尾根経由)～赤岳(2,899m)～阿弥陀岳(2,805m)～美濃戸口。

赤岳山荘と赤岳頂上山荘にそれぞれ1泊。

この標高を登り降りするのは十数年ぶり、数十年ぶり、現役以来等の参加者が大半でしたので、トレーニング登山等の事前準備を念入りに行いました。

赤岳山荘の食事は山小屋の中では絶品に類すると言えるでしょう。道中全般で食べ物が大変美味しく、私個人の話ですが体重を2kg増やして九州に戻りました。

赤岳頂上山荘の360度の展望は圧巻でした。展望が開けると皆から自ずと歓声が上がりました。富士山、日本アルプスは元より、数多くの名山がはっきりと見える好天に恵まれました。

東京支部の市川さんには駅や登山口の送迎、また下山後は市川邸に泊めていただき打上げ会をさせていただくなど、大変お世話になりました。ありがとうございました。

★2024年10月12日(土) 日帰り山行 八方ヶ岳(林が効)

★参加者 5名

八方ヶ岳は熊本県山鹿市にある標高1,052mの山です。変化に富んだ登山道と、その名の通り360度の展望が人気の山です。今回は、登り半分で体調不良者が出たため名誉の撤退となりましたが、深い緑に覆われた矢谷溪谷沿いの道を気持ちよく歩きました。アサギマダラに出会うこともできました。

★2024年11月9日(土) 日帰り山行 英彦山(北岳)

★出席者 4名

大峰山(奈良)、羽黒山(山形)とともに日本三大修験道場として知られる英彦山は、英彦山神宮上宮がある中岳とその両隣に南岳、北岳の三つのピークを持つ山で、大分県境近くに位置しますが、その特徴のある山容は福岡市内の低山からも容易に確認できます。現在、上宮が改築工事中で2025年12月まで中岳は立入禁止になっています。今回は北岳に登りました。身の竦む長い鎖場、1,500年の間、修行で踏まれ滑りやすくなった岩の道など退屈せずに歩くことができました。

★2024年11月23日(土) デイキャンプ 今宿野外活動センターにて

★出席者 9名

昨年、コロナを乗り越え再開したデイキャンプを今年も開催し、美味しいお肉を堪能した後、武富さんの畑で芋掘りをするなど楽しい時間を過ごしました。武富さんが育てられたサツマイモの大きさに皆びっくりでした。綺麗な菜っ葉付きの大根やサトイモもいただきました。

偶然にも、会場である今宿野外活動センターのセンター長さんがS63年山大経済学部卒であることが分かりました。センター長さんは我々にご挨拶に来られ、センターは大きな改造・改築工事の予定で2年程使えなくなると説明いただきました。営業再開後の運営は民間に委託されるとかで料金が上がることも予測され

ます。多くの会員が楽しみにしているデイキャンプが存亡の危機に。さてどうしたものか・・・。

7月27日暑気払い
博多つつじ庵にて



9月16日
赤岳山頂
*後方に南アル
プスと富士山



9月16日
阿弥陀岳山



11月9日
英彦山(北岳)



11月23日
デイキャンプ
武富さんの畑で芋掘り

5. 現役報告

「現役近況報告」

山口大学ワンダーフォーゲル部 人文学部4年 緒方 若菜

OB会の皆様、日ごろから現役生の活動へのご支援、誠にありがとうございます。現役生の活動を皆様にご報告させていただきます。

5月の新入生歓迎登山が終了したら、次に待つイベントは、萩での海浜合宿と、夏合宿です。

海浜合宿は、部員数が多いため、7月20・21日と8月7日・8日の2回に分けて開催させていただきました。7月開催の合宿のみではありますが、山口県立大学ワンダーフォーゲル部の1年生3名も参加し、山口大学と県立大学との交流もすることができました。コテージをお貸しいただいた田村様には、スイカの差し入れもいただき、大変楽しい時間を過ごすことができました。この場を借りて、心より感謝申し上げます。



8月12日には、夏合宿に先立ち、湯田温泉駅から秋芳洞までを歩く歩行訓練を実施しました。新入生の参加が多く、「車でいったことはあるけど、歩いていくとこんなに遠いのか。」という言葉が皆で口にしながら、秋芳洞までの道を歩きました。炎天下の中での実施でしたが、体調不良者を出すことなく帰路につくことができました。新入生の方が上級生よりも疲れが見えず、山大ワンゲルの未来は明るいと、個人的に感じました。



今年の夏合宿は、8月18日～23日に、南アルプスの北岳・間ノ岳・塩見岳で行いました。(8月25日～30日にも2回目を開催する予定でしたが、8月22日に発生した台風の影響で、やむなく中止となりました…。) 悪天候にみまわれることなく、登山前半は天候に恵まれ、事故も怪我もなく実施できました。登山中には、天然記念物のライチョウに遭遇したそうで、登山中止で南アルプスに行けなかった私としては羨ましい限りです。



部のイベント以外での、部員同士による自主計画登山も活発になっており、10月の3連休に徳島の剣山に登った部員や、11月の3連休に鳥取県の大山に登った部員がいます。部の登山イベントを通して、登山に魅せられた部員が多くおり、非常にうれしく思います。これからは、1年生も巻き込んでの自主計画登山を行い、さらに活発な活動を続けていきたいと思っています。

最後に、これから先の部のイベントとしましては、春休みにスキー合宿と春合宿があります。徐々に1年生が部のイベントにかかわってきますので、どんなイベントを企画してくれるのかを楽しみにしつつ、部の伝統を守りながら、活動を続けていきたいと思っています。

6. 同窓会だより

「S54同期会 夏の新穂高温泉」

東京支部 S54年 工学部卒 木下 嘉郎

隔年開催中の54同期会も5回目です。今回は北アルプス西穂独標登山と観光で9名が集まりました。

場所：新穂高温泉 西穂高岳独標登山と奥飛騨観光

期間：8月21日-23日(2泊3日)

メンバー：本部 池田、桑江、小泉、足立、濱野

工学部 田中、柳楽、陸浦、木下(記)

メッチェン3名を含む計9名

昨年東京チーム3名で事前調査ワンを行いました。私だけ独標手前でバテて登頂断念しました。不安を残しながらの本番ですが全員(登山組7名)で無事登頂できました。

初日は奥飛騨温泉郷のペンションに各地から集合ですが、九州帰省から戻りの私と松江から参加の陸浦君は車で一足先に到着です。もちろん宴会用のお酒も買い込んで準備万端です。なんと自家栽培のスイカを新幹線で持参してくれた足立君ありがとう！ペンションは我々の貸し切りでオーナー自作の露天風呂にも浸かり明日に備えますが、皆の近況を聞きながらつい前夜も盛り上がりました。

本番当日は、夜中に雨音が聞こえ不安を抱きながらの朝でしたが新穂高ロープウェイでしらかば平駅から西穂高口駅(2156m)まで上がれば雲の上です。ガスはありますが西穂岳と今日の目的地独標も何とか見えました。ここで観光チーム2名と別れて、いざ登山開始(9:05出発)西穂山荘へ向かいますが今年は山も暑いです。2156m西穂高口駅で18.8度ですから、途中お花(トリカブト、桔梗等)等や雲の合間から見える景色を楽しみながら割と順調に西穂高山荘、丸山を通過。ピークが近づいたところで念の為ヘルメット装着して少し緊張します。久しぶりの岩場を慎重に登り無事全員でピークに立てました(12:50独標登頂2701m)

帰路私はさすがに足にきてペースは上がりません。名物の西穂山荘ラーメンは残念ながら時間切れで食べられず、そのままロープウェイで宿へ向かいます。

観光チームはロープウェイで新穂高温泉に下りたあと平湯大滝や禅通寺を回ったそうです。(田中君の趣味が入っていますね!)17時には宿について食事の後は離れて盛大に打上げを夜遅くまで楽しみました。まるで50年前に戻ったような気分になったのは私だけではないと思います。

最終日は見事な晴天で宿からも笠岳、焼岳がきれいに見えました。また2年後の同期会、次は山口での再会を楽しみにしています。



登山出発前の元気な姿 左から濱野、桑江、田中、柳楽、陸浦、足立、池田、小泉、木下



稜線



西穂独標2701m 登頂



打上げ会場（まだお酒が並ぶ前）



最終日 晴天です

7. エッセイ

広島県/島根県 最高峰 恐羅漢山

関西支部 S48年 経済学部卒 上田 功

筆者が今も大切にしている学生時代4年間のYUWV活動を記した古いノートの巻末には、4年間の山行の足跡が年月別に以下のように簡潔に記されている。

1969/ 5 24→25 新人合宿 東西方便 31→
/ 6 →1 錬成 東西方便 21→22 錬成 十種ヶ峰
から始まり、.....

1973/ 3 3→10 屋久島FW 13 アザミ岳 16→21 南ア 駒、仙丈 迄。
その中の

1972/10 8→13 西中国山地ブッシュ

当該ノートに記されている山行の個別記録の詳細は以下の通りだ。

1972(昭和47)年10月8日、山口を発って夕刻三段峡駅へ。近くの寺院(泊)。9日、三段峡正面口から歩き始め、樽床貯水池迄行動(テント泊)。10日、聖山を経て県境尾根に取り付きハードに行動(稜線上でテント泊)。11日、沢へ下って飲料水補給後、強烈なブッシュ(笹、灌木)を経て、午前11時20分 恐羅漢山に登頂。その後、踏み跡等を辿り横川越へ(稜線上でテント泊)。12日、沢へ下って飲料水補給後、県境尾根を更に進み、匹見に下る林道の終点地点の峠部に到達(テント泊)。13日、朝食準備中のテント内で筆者が左足首に熱傷を負い、同行者の松林義明氏(1期下)が119番通報の為、先行して下山。痛む足を引き摺りながら林道を下った筆者は、約2時間半後に林道中間部で救急車に収容された。

今では昔語りとなろうが、当時は赤軍派の山岳アジト事件が全国的に世間を揺るがして、警戒体制下の島根県警匹見駐在所でも「スワッ! 当地にも赤軍派か!」と、どうも身構えたようであった。匹見の中村医院で応急治療を受けた後の同駐在所での事情聴取では、“真面目な”山口大学生2名が県境の山岳地帯の道なき道を物好きにも歩き回っていたようで事件性は特になしとのことで無罪放免され、大事には至らなかった。50年以上昔にそんな事が確かにあった

そうした懐かしいような因縁の恐羅漢山に、先般2024(令和6)年11月9日に2度目の登頂を果たした。大阪梅田発着・安芸太田町「いこいの村ひろしま」宿泊の1泊2日の登山ツアー。牛小屋高原からスキー場のグレンデの横を登り夏焼峠を巡る周回コース、休憩を含めて約3時間の行程で往時に較べると随分と楽な筈であったが、こちらが50余年馬齢を重ねている分、程良く釣り合っていたということも出来よう。

実は、47都道府県最高峰のリストでは、恐羅漢山が広島、島根両県の最高峰とされている。筆者としては、前回は広島県最高峰として数え、今回を島根県最高峰として数えたかったのかもしれない。

尚、文献が何かで島根県最高峰が安蔵寺山(あそうじさん)であることを当時見聞きした学生時代の筆者が、山口に居る間に登っておこうと思ったのかどうか。当該ノートには、

1971/ 3 6→7 安蔵寺山 が記されている。

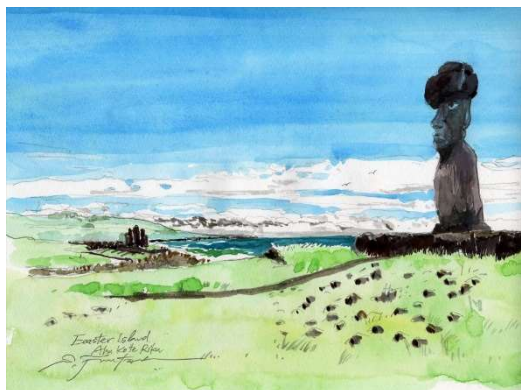
6日、山口を発って津和野から青野山に登った後、東麓を移動して登山口の村へ 三島神社(泊)。7日、積雪の残る見事なブナ林の中を駆けるように安蔵寺山に登り、鹿野を通過して徳山へ出て山口の下宿へ。

いずれにしろ、この度の山行で広島県/島根県最高峰はクリア出来たので、残りは7県7座。中島みゆきさんの歌詞を借りるなら、旅はまだ終わらない.....ということなのだろう。ヤレヤレ。

「遙かなるイースター島」

山口支部 S52年 経済学部卒 古谷 眞之助

今から22年前の2002年の暮れから正月にかけて、小学校4年生の時から憧れの地だったイースター島を一人訪れた。1週間足らずの滞在期間の最終日に島の最高峰であるテレバカ山(Terevaka、507m)にも登って、誰一人いない山頂から眼下に広がる島を一望した時に、訪れる前に少しばかり勉強した島の歴史を思い出しながら、ふと思いついた村娘の物語を帰国後にまとめたものが、以下の掌編である。



ラパヌイ(イースター島)のコテリク海岸に立って、ハンガロア村の少女・イティはモアイの立ち並ぶ丘の上から西の海を見つめていた。その方角には祖母が教えてくれたヒロニブラがあるはずだからである。そこはムー帝国の首都にして6,400万人を擁する美しき都である。祖母の話す伝説によれば、今から12,000年前に大地震が始まり、それは1か月もの間、止むことなく続いた。地下のマグマにより、ムー大陸の大地は絶え間なくうち震え、各所で盛り上がり、また沈んだ。ついに地は割れ、十を数えた国々は四散した。かくして6,400万人の住民は、ムー帝国とともに消滅した・・・

ラパヌイの西と北に広がる海にあったというムー。首都ヒロニブラには格子状に道が設けられ、街道が四方八方に張り巡らされて人々が行き交い、ひっきりなしに馬車が走っていた。近くには大きな湖があって、そこにはいくつかの大河が流れ込み、さらにそこからは何本もの運河が伸びていた。運河には大洋を横断できる大型の帆船が浮かび、威勢の良い船乗りたちの声に溢れていた。街の中心の小高い丘には、美しい石を緻密に積み上げた宮殿が高く聳え、その背後には創造神ラーを称える飛び切り大きな祭壇があったという。

イティはしかし、祖母の言葉を信じ切っているわけではない。祭壇は山腹に築かれたムーの神殿の跡地で、そこから海に向かって下る階段を降りれば、さらに海深くにまで続いており、やがてかつての街並みに達することができること信じているハンガロアの村人は、もはや誰もいないのだ。しかし、遠くを見つめるモアイの目を見ていると必ず、とても信じ切れないその話が、彼女の幼い胸をなぜか騒がせるのである。その理由はイティには分からない。ただ、モアイの側に立つと、決まって不思議な力が彼女の体の隅々に満ち溢れてくるのは感じる。だからこそ、時間が取れると一人コテリクの海岸のモアイの側に立ってしまうのだろう。

海風が彼女の長い髪を揺らした。ふとテレバカの頂を見上げると、貿易風のせいだろうか、一条の雲が糊引いている。海岸からなだらかなラインで駆け上がる稜線。そのたおやかな山容を見つめていると、まだ一度も登ったことのないこの島の最高峰に、いつか必ず立ってみたいとイティは思った。そしてそこに立てば、祖母の言うヒロニブラが水平線の彼方に見えてきそうな気がしたからである。

ポイケの山々の背後に朝陽が昇ってきたらしく、水平線の向こうが赤く色づいてきた。海の彼方を見つめるイティの頬を風が軽やかに撫で、海鳥の舞う海岸から緩やかに吹き寄ってくるその風は、強い潮の香を運んできた。眼下に見下ろすトンガリキの15体のモアイが濃いシルエットになって美しい。イティは今、高々100mにも満たないラノララクの火口の淵に立っている。テレバカに連れて行って欲しいと父に言っていると、父は「あの山は、まだお前には無理だから」と言って連れて来てくれたがこの山だった。目を転ずれば火口は水を満々とたたえており、南斜面には切り出し途中のモアイのいくつかははっきり見えている。稜線に立つまでの道すがら、父は祖母とは全く違う先祖の話をしてくれた。「イティも年頃になったから、話しておかねばならないな」と、いつものやさしい父とは違って、幾分厳しい顔をして、そう言ったのである。



父によれば、ラパヌイの祖先はムーなどではなく、ずっと下った5世紀の頃、ポリネシア・マルケサス諸

島「ヒバの国」の王、ホツ・マツアに率いられた一族なのだという。ハナウ・エエベ族と呼ばれた彼らが何千キロもの苦しい航海を経て辿り着いたのが眼下のアフ・トンガリキだった、と父は語り、この辺り一帯はラパヌイの中でも特に神聖な場所なのだ、と付け加えた。話を聞いてイティは少なからず戸惑いを覚えた。しかしイティは、続いて父の語ったポイク岬のアナオケナの儀式の話には強く興味を持った。その話とはこうである。「その昔、毎年春になって海鳥が渡ってくると、11歳になる娘たちが島の12の村々から選ばれて『太陽の沈む洞窟・アナオケナ』に閉じ込められた。彼女たちは全身に白と赤の色を塗りたくられ、以後2年もの間、洞内に閉じこめられたまま、ひたすら古来の歌を歌い、祈りを捧げることを強いられた。一切太陽にあたることのない娘たちの肌は、やがて純粋無垢の象徴である白へと変わって行った。そして、彼女たちのうち最も肌の色の白い娘は、選ばれて創造神マケマケの生贄とされたのである・・・」イティは、それで初めて理解した。やさしい母が自分と違って幾分か白い肌をしていることの訳を。そして、どこか遠くを見つめて目を合わすことなく語ってくれた父の目に白く光るものを見た時、イティは一瞬の内にはっきりと感じ取ったのである。自分もまた今年の12人の一人に選ばれたことを。イティは父と同じく再び視線を水平線の彼方へと戻した。そしてその瞬間、短く「あっ」と声を上げた。その向こうにムーの都ヒロニブラではなく、マルケサスの島々が、かすかに見えたように彼女には思えたからである。

トンガリキ海岸のモアイの側に立って、イティは曾孫娘トゥキとポイクの岬を眺めていた。断崖に風が吹きつけて強い上昇風を作っているらしく、海鳥が数羽舞っている。それを見つめるイティの目にはしかし、海鳥は少しも写っておらず、その目はそのずっと奥にある「太陽の沈む洞窟」に向けられていた。あれから一体、幾年が過ぎたのだろう。父に諭され、12の村の代表者の一人に選ばれた彼女は、何の疑念も持たずに、母と同じように洞窟の中で古来の歌を歌い、ひたすら祈りを捧げる2年間を過ごした。それはとても辛い2年だった。しかし彼女は、幸いというべきか、不幸というべきか、創造神マケマケの生贄とされることはなかった。洞窟で暮らす彼女の肌は次第に白くなっていったが、イティの友人の方がもっと白くなって、彼女がマケマケに召されたからである。洞窟での2年が終わる頃、神官がやってきてその友人を名指した時、イティは軽い眩暈を覚えたのを今でもはっきりと覚えている。友人の幾分か青ざめた頬と、それにもかかわらず、どこか勝ち誇ったような恍惚とした彼女の目を、イティは今でも忘れることができない。

イティは、傍らに立つ曾孫娘のトゥキの手をしっかりと握って、少し迷いながらも語り始めた。「いいかいトゥキ、ずっとずっと昔のことだかね、イティ婆やは、あの岬の洞窟でくらしただことがあるんだよ」トゥキは不思議そうな顔をして聞き返した。「えっ、どうして洞窟なんかで暮らしていたの?」「それは・・・」そうだった。それを詳しく話したとて、幼いトゥキに一体どれだけ理解できるだろう。ましてや一番色が白というそれだけの理由で、親しかった友が選ばれて生贄とされたことなど、新しく村に出来た学校でスペイン語を学び始めたトゥキには、想像さえ出来ないことなのだ。そして、自分達がムーの末裔だと、あるいはマルケサスのヒバの末裔だと言ったところで、それを信じる人など一人としていないのだ。そんな伝説は、



もはや読める人とていないラパヌイの文字「ロンゴ・ロンゴ」のように、遙か彼方のものとなってしまったのである。ハンガロア村に長い滑走路なるものが造られ、あの怪鳥とも思える鉄の固まりが空を飛んで、多くの人々を島に運んでくるようになったことが未だに信じられぬイティは、余計なことを言ったと、悔いていた。これで良いのだ、全ては遠い過去になるのだと、イティは自分に言い聞かせた。風が強くなり、それを機にイティは、思いを断ち切るようにトゥキの手を握り直して、村へと踵を返した。
(イラスト・筆者)

いま私の取り組んでいることの一つに京都から東京までの徒歩旅行がある。健康のためにできるだけ歩くようにしているがどうせ歩くなら東京まで歩いてみようと、日帰りまたは一泊ぐらいで歩き、また続きを踏破する方法だ。最初は単に歩くのを目的としたが、意外と昔の旧東海道が保存されており今はできるだけ旧東海道を選んでいる。歩いてみて気付いたのだが、旧街道を歩いて旅をする人は多く同好の人とよくすれ違う。移動速度が遅いので、景色が堪能できその土地の人々の生活が垣間見えて実に楽しい。ほんとは東京（日本橋）まで到着してないが時間がかかりそうなのでいくつか印象に残った場所を歩いた順に書いておく。

草津—水口 草津は京都から3つ目の宿場町で地元。しょっちゅう飲みに来る場所だがそこが旧東海道であることに初めて気づく。近所なのに初めて草津本陣に訪問。宿帳には土方歳三 浅野内匠頭、吉良上野介などの有名人の記載がある。ここの少し京都寄りに街道交流館があり覗いてみる。当時の旅人の服装や宿の食事が紹介されており、粗末ではあるが二合徳利が置いてあり歩いた後の一杯はさぞかしうまかっただろう。このような街道の資料館は旧東海道の主だった宿場町には結構置かれており話し好きの案内人が常駐していることが多く楽しい情報を教えてくれた。このことは街道の宿場ごとにそのあとしばしば経験することになる。途中東海道と中山道の分岐点の道標を右に曲がりひたすら進む。途中名物の団子を売る茶店がたくさんあるがこのころはコロナの影響で軒並み閉店残念。石部を過ぎ、三雲で野洲川を渡る。昔の橋の位置に高さ8mくらいある大きな常夜燈がある。常夜燈は夜歩く旅人のために設置された石作りの灯籠。江戸時代は湯水期以外は渡し船を使っていたが今は簡単に橋で渡る。常夜燈は、一里塚とともにこれからたくさん目にすることになる。水口はわが甲賀市である。長く住むが東海道をきっちり歩くのは初めて。宿場の道はあちこちで曲がっておりトレースするのに苦労する。大きな宿場では、あえて道をまっすぐにしなない例をしばしば見る。

土山—鈴鹿峠、坂下、関 難所といわれている鈴鹿峠、東の箱根と比べられるが、先日箱根を歩いたがこちらの方がはるかに楽である。先の草津、石部、水口、土山宿と歩を進め厄除けで有名な田村神社を抜け、海道橋を渡ると旧道は国道1号と合流横を車が通る狭い歩道を行く。峠手前で国道に設置されている歩道トンネルを抜けトンネル横の山道が旧東海道。街道なのに登山道のような雰囲気。ここにも常夜燈がある。途中鏡石の標識を見る。鏡石とは昔この地にいた山賊が表面に写る旅人を見て襲ったのだとか。100m以上歩いて現物を見ると表面は風化しておりそんな面影はなかった。めずらしく若者とすれ違う。京都から歩いていることを告げると大いに驚かれたが、昔の人のことを思うとどうってことないのだが。鈴鹿を越えれば坂下宿である。狩野元信が絵を描くことを断念したためその名がついた筆捨山を正面に見る。奇岩が多い山とあるが植生のため平凡な山としか見えない。関宿は町を挙げて宿場町を保存しており条例により家の建て替えや、電柱の設置方法など工夫されておりそのため昔の情緒がよく残っている。観光地としても有名なので一度訪れてほしい。

亀山—桑名 亀山市内の街道筋は商店街になっている。街道筋が商店街になっているケースが多々あるがシャッター商店街化し寂しい場所が多々あり亀山もそのようだ。亀山を抜け庄野という小さな宿場町がある。「庄野の白雨」という広重の絵で街道を歩くうち案内板によく登場する広重の絵に興味を持つようになった。版画でなぜあのような表現ができるのか興味があって数か月前あべのハルカス美術館へ本物を見に行ったことがある。それでもよくわからない。版木と版画の作成工程を見なければ無理のようである。四日市から桑名にかけては、交通量の多い道を歩くことが多く印象は良くない。桑名宿からは海路で宮宿までのいわゆる「七里の渡し」今は定期便としては無いので電車を使い宮宿まですいすいに行く。

旧街道をこれから歩きたい方へ 旧街道を歩いてみたいと思う方にアドバイスしたいと思う。旧街道は新しく道がつけられたり風化したり、昨今の災害で通行止めになったところもあり消失しているところもある。そのためどの道が旧街道か見極める必要がある。まずは参考となるガイドブックがあるのでそれを手に入れること。案内板や道標、一里塚（跡）を確認する。旧街道は道がまっすぐでなく微妙にくねっているのが判断できる。縄手道（躰）と呼ばれる意図的にまっすぐに作られた道（石部—水口や、関—亀山）もあるがこれは例外中の例外。街道を紹介する資料館があちこちにあるので覗いてみるといい。話し好きの係りの方が常

駐しており街道を歩いていることを告げると親切にもいろいろ情報を教えてくれる。旧東海道を歩くなら私のように京都からでなく東京から京都に向かう方がガイドブックの案内や道標の向きが分かり易くなっている。ページ数が少なくなったのでこの続きは次回で。

ふるさとの山、皿倉山に登る

東京支部 S50年 経済学部卒 塩塚 保

わたしのふるさは九州の鉄の街、八幡である。
高校時代までこの、激しく、活気あふれる工業都市で暮らした。

岩手県出身の石川啄木は名歌を残している。

ふるさとの山に向かひて言うことなし
ふるさとの山はありがたきかな

わたしにとって、ふるさとの山は、皿倉山（さらくらやま）だ。標高622メートル。
皿倉山……。不思議な名称の山だ。

神功皇后伝説に基づくという。その昔、神功皇后がこの山に登った。山頂から見渡す眺望はすばらしい。時間を忘れて眺めているうちに日が暮れてくる。下山しよう。さらに夕闇が深くなっていく。皇后はいった。

「さらに暮れたり」

この故事にちなんで「更暗山」と名付けられた。その後、「皿倉山」に転じたと伝えられる。

東京から帰郷する。新幹線の小倉駅で鹿児島本線に乗り換える。戸畑駅を過ぎると、裾野の広い、雄大な山が見えてくる。皿倉山だ。「八幡に帰ってきた」と実感する。

◇久々の帰郷

さて、2024年9月、私は久々に帰郷した。

今、娘の家族が福岡市で暮らしている。小学1年生と4歳児の男児がいる。娘が提案した。

「皿倉山に登ろう」

わたしのふるさとの山にふたりの幼い息子を連れていきたいという。異存はない。

皿倉山にはケーブルカーがある。わたしは提案した。

「登りはケーブルカーで。帰りは歩いて下山しよう」

だが、娘はそれでは意味がないと反論する。汗をかいて登ってこそ、少年の心にわたしのふるさとの山が刻まれると主張するのだ。なるほど。

◇折尾のかしわめし

八幡駅の売店で駅弁、折尾のかしわめし（東筑軒）を買う。八幡っ子の好物だ。リュックに駅弁とお茶を詰め込んでいざ、出発。

皿倉山は急峻ではないが、それなりに高い山だ。果たして幼い少年は登れるだろうか。

案の定、中腹で小学生の少女ふたりを連れて、下山する男性に出会った。事情を聞くと、登山の途中で少女が「もう登れない」と音を上げた。結局、ふもとに戻り、ケーブルカーで登ることにしたそう。

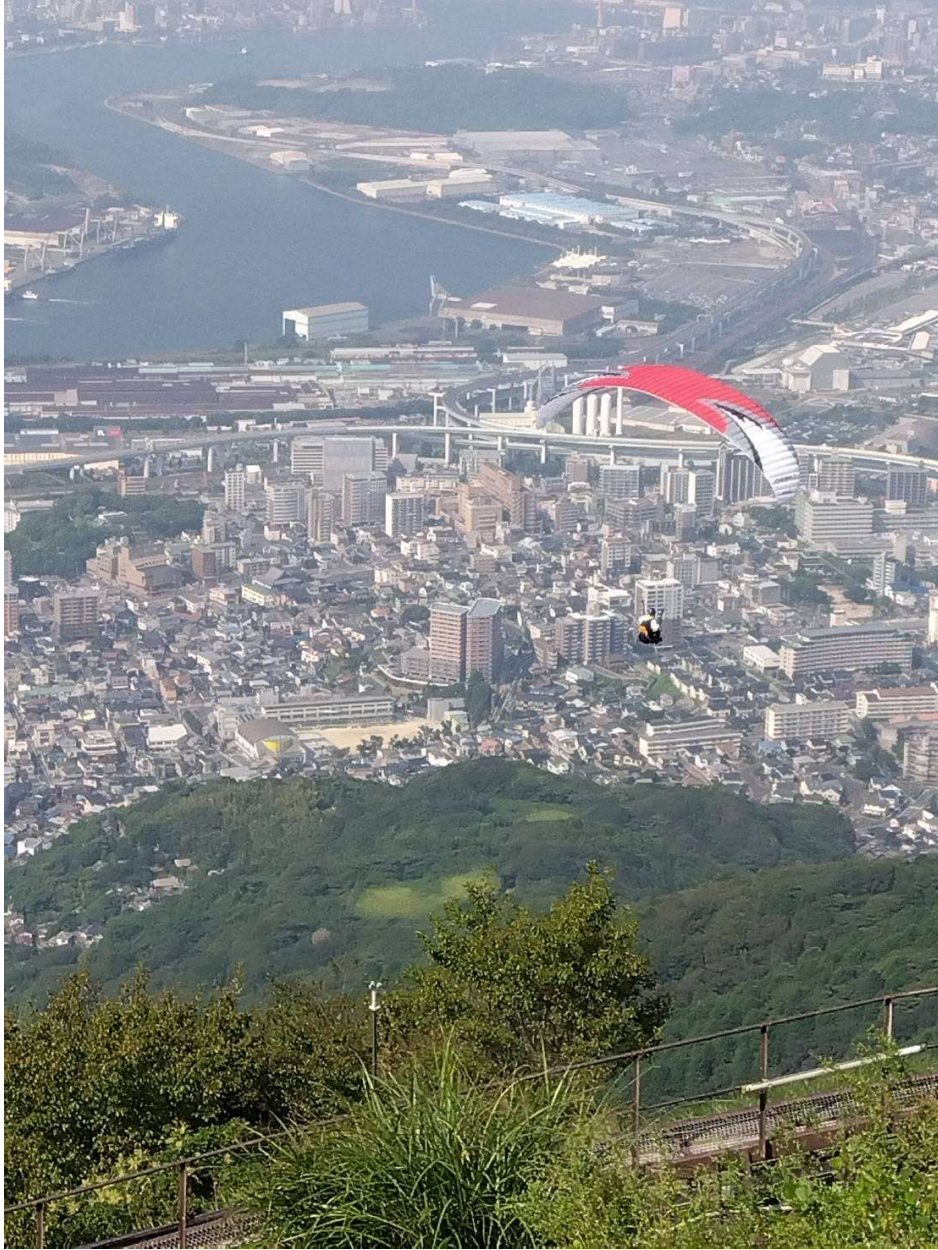
だが、ふたりの孫は不満もいわず、黙々と登る。4歳児は社交的だ。登山客と行きかうと、自分から声をかける。「こんにちわ。あちゅういですね」「こんにちわ。とおいでちゅね」。登山客は「かわいい。こんな小さい子がよくまあ・・・」と、にこにこ顔。

途中で休憩を繰り返し、お茶を飲んで、ようやく8合目に着いた。このあたりから眺望がひらけてくる。ベンチがある。駅弁を取り出し、昼食休憩。折尾のかしわめし。うまい。

◇山頂に立つ

さあ、山頂まであと少しだ。ようやく、山頂に立った。さわやかな風が吹く。北九州の街並み。工場群。赤い若戸大橋。そして洞海湾。響灘。遠く、玄界灘までが一望できる。

風に乗ってパラグライダーが空を飛ぶ。皿倉山はパラグライダーの名所なのだ。
わたしと娘と孫。パラグライダーの飛行を見る。幸せな時間が流れる。下界に目を移す。
わたしの実家がちいさく、ちいさく、見える。



(皿倉山を飛ぶパラグライダー)

「西田圭吾君 逝去のご報告」

山口支部 S60年 農学部卒 齊藤昌彦

西田圭吾君 逝去の報に接して。
今日(2024年12月26日)、同期の岸義文君から同期会のLINEグループに以下の内容が届きました。

訃報。
西田圭吾様。(2024年11月)21日ご逝去されました。
ご冥福をお祈りいたします。
奥様より連絡がありました。
現実を受け入れられません。
身内で葬儀もすませたそうです。
携帯を処分するそうなので、
ご家族とも連絡できなくなります。
まだ信じられません。

この内容に同期会のLINEグループでは、「信じられない」、「早すぎる、悲しいです」、「合掌 会いたかったのに。」との書き込みが次々と上がりました。西田君は、鳳凰会や山口支部の活動にも積極的に参加して、同期のみんなをつなぐ、かけがいのない仲間でした。その人柄で同期だけでなく、先輩、後輩からも愛された人物でした。事ある毎に声をかけてくれて、同期との再会の場を設定してくれたのも彼でした。彼なしには、同期とのつながりが今のように続いていなかったと思います。

西田君は、11月11日の同期LINEグループに帰山した田中正則君と宮本博君の懇親会の写真に寄せて、「ノンアルで付き合うぜ」という最後の投稿をしていました。

西田君 今度むこうで会ったら、本物のアルコールで付き合ってください。

どうか、安らかにやすみください。合掌
同期の追悼のLINEを紹介します。

西田圭吾様ご逝去にあたり。ご家族のご意向により供仏等ご遠慮するとのことです。(岸さん情報) 皆さん心よりお悔やみ申し上げます。(岡崎雅治)

えー、お悔やみ申し上げます(田中正則)

快方の様子でしたが、突然の悲報で何とも言えない気持ちです(桑原潤)

突然すぎて何も言えん、合掌(仁保)、早すぎる、悲しいです。(宮崎圭二郎)

まだ信じられない思いです。夜の席でも一緒におきたかった。心よりお悔やみ申し上げます。(小島) ついこないだの11/11にこんな投稿したばかりなのに信じられん、謹んでお悔やみ申し上げます。

(宮本博) 追悼文は、落ち着いてからにさせていただきます。(文責 齊藤昌彦)



写真は大学1年夏合宿後の一コマ(左端が西田圭吾君)

退職して九州に戻った頃、テントを持ってどこに行こうかと、まず思い浮んだのが坊ガツルでした。長者原まで自宅から一般道で3時間強。途中の道の駅で買ったお弁当を長者原駐車場の横にある公園のベンチで三俣山を眺めながら昼食とし、坊ガツルまで2時間強歩きます。朝8時に家を出れば15時までにはテン場に着きます。テント設営の後、大船山が夕陽に染まるのを眺めながらビールで過します。翌朝は久住山、中岳、白口岳、三俣山などがモルゲンロートに染まります。

坊ガツルはミヤマキリシマの時期や、大晦日には多くのテントが並びますが、それでもスペースに十分余裕があります。街の雑踏から離れたい時、ここにテントを張っています。

祖母山、傾山の縦走路に好きなテン場がいくつかあります。縦走路の中間点の尾平越。ここは1年中水が涸れないとか。ここで水を汲もうとしてニホンアナグマが水を飲んでいましたので、飲み終わるのを待ったことがありました。ニホンアナグマは人に出会ってもそれ程恐れないし、何だか無視されたような気分になります。その東の本谷山山頂に小型テントを一張り張れるスペースがあり近くに水場もあります。ここは御来光に染まる祖母山を眺めることができます。傾山の近く、九折越も快適です。水場までは少し下る必要がありますが、ここから登る傾山は、岩肌を露わにそびえる二つのピークがヨーロッパの大聖堂の様な姿に思えます。ヨーロッパに行ったことはありませんが・・・。

涸沢。6年前、4泊5日の予定で行きましたが、都合で1泊しかできず残念でした。それでも大変印象に残っています。涸沢は色々な人がいらっしゃいます。私の様に一般登山道を奥穂や北穂に登る方、ロッククライミングの装備の方、涸沢を目的地としてテントを張りコーヒーを立てて楽しんでおられる方。ピークハントだけが登山じゃないなと改めて思いました。テレビ等で見ると涸沢はテントが密集しているように見えますが、そうでもないです。大きな岩がゴロゴロのテン場では、どこでも自在に設営できるわけではなく、自然と岩と岩の間にそれなりにテントの間隔が空きます。モルゲンロートをはじめ絶景は最高です。ただし、自分のテントの位置をしっかりと確認しておかないと迷子になります。

奥多摩小屋。小屋が老朽化し既に取り壊されて管理人もいなくなり、現在はテント設営もできないと聞いていますが、東京在住中、最も利用した雲取山のテン場です。冬型の気圧配置が強く、私の技術と体力では他に行く所が無い日によく利用しました。テント好きの方が春夏秋冬利用するところで、冬の寒い日でも週末はけっこうなテントの数でした。朝起きれば樹氷が迎えてくれ、樹氷の木々の向こうに富士山を拝めました。

針ノ木峠。日本三大峠に南アルプスの三伏峠、奥秩父の雁坂峠、そして北アルプスの針ノ木峠があるのだそうです。扇沢から針ノ木大雪渓を登り、針ノ木峠にテントを張りました。ここは針ノ木岳や蓮華岳から立山、剣、槍、穂高が一望できる人気の場所ですがテン場は大変狭く、油断すると谷に落ちそうな所にテントを張りました。それでも、ビール片手に槍を正面に眺めた光景が思い出されます。

三条の湯。雲取山から山梨県の丹波山村側に下ったところに三条の湯と言う温泉のある山小屋があります。溪流沿いにひっそりと建つ小屋です。昨秋に奥秩父を縦走した際、ここでテントを張り温泉に入りました。縦走最後の夜でしたので、温泉の何と気持ちの良いことか。それ以上に、売店に冷たいビールはもとより何と私の大好きなお酒「澤乃井」があるではありませんか！しかも冷えている！大満足で縦走最後の夜を過ごすことができました。

一人テントでラジオを聴きながら、お酒と定番のおつまみで過ごし、そのうち、うとうと、お山に優しく抱かれたような心地になったころ、しだいに眠りに入ります。誰にも気遣うことの無い、極上の自由な時間です。「自立し、自由で、優しく」サラリーマンを辞める時、そういう人間になりたいと思ったのですが、今、自由さは感じていますが、自立とのバランスが問題です。自分のことを自分でできているか。それができずに自由などとは言えないと。優しくなるには、もっと自分の内面を整理する必要があると思います。まだほど遠いと感じます。お山は自分を振り返り内面を整理する場としてもいい所なのかも知れません。

山口市のシンボル「ザビエル記念聖堂」。皆さんご存じですよ。そのザビエル記念聖堂が建っている小高い山、「亀山」と言って、標高は66メートル。これもご存じかな。私の今の職場、日本赤十字社山口県支部から山頂にある広場までは1.3kmの距離。散歩にはうってつけです。昼休みになったらウォーキングシューズに履き替えて、いざ出発。途中で、龍福寺、一の坂川、パークロードを見ながらの散歩です。

龍福寺は、毛利元就の長男・隆元が、養父の大内義隆の菩提寺として建立した寺です。参道の両端にもみじが並び、今の季節、紅葉がとても綺麗です。今年1月、アメリカのニューヨークタイムズ紙が「2024年に行くべき52カ所」に山口市を選出しているのですが、記事に使われた写真が龍福寺参道のもみじの紅葉でした。

一の坂川は、室町時代に京を模して造られた山口の街のなかで鴨川に見立てられた風情ある川です。春は桜、初夏にはゲンジボタルが鑑賞できる山口市民の憩いの川です。

パークロードは、全長780m、道幅40mの「日本の道100選」にも選ばれている道です。春から初夏にかけては青々とした木々が生き茂り、秋には赤や黄色に染まった葉が舞う美しい景観を楽しめます。私は、初夏のころパークロードの地下道を抜けたときに目に飛び込んでくる新緑の景色がとても気に入っています。このパークロードを過ぎると亀山公園です。

亀山は公園の中にあります。麓から180段の階段を一気に駆け上がる・・・というわけにはいきませんが、年齢なりの体力に合わせて登ると、目的地の山頂広場に到着です。ここまで約20分弱。山頂広場は平成30年9月にリニューアルオープンしました。それまで視界を遮っていた大樹が伐採され、市内を一望できる素敵な場所に生まれ変わりました。東鳳凰山の山頂もわずかに望めます。県立山口高校、ザビエル記念聖堂、ふるさとのデパート井筒屋、山口赤十字病院、山口県立大学、瑠璃光寺五重塔、山口県庁と順に眺めながら広場を一周し、息を整えから職場に向けてUターンです。膝を傷めないように注意しながら階段を下り、来た道と少し変えて、往復40分弱の散歩が終了します。

散歩の後のお楽しみは、再放送の朝ドラを見ながらのお昼のお弁当。私の平和な昼休みでした。来年度の総会は山口支部の引き受けです。山口市内にお寄りの際には山口市内を散策されることをお勧めします。



龍福寺参道のもみじ



一の坂川の桜



山頂広場からのザビエル記念聖堂

8. 近況報告

「ひざ痛に思う」

九州支部 S54年 文理学部卒 桑 江 保 子

膝を痛めてしまいました。10月中旬、八方ヶ岳登りで左足を大きく振り上げたとたん、ピキッと衝撃。痛さで左足に力が入らず、頂上はあきらめて下山。同行の九州支部のみなさんに、多大な迷惑をかけてしまいました。

数日で痛みは引いたので、いつものウォーキング。調子に乗って速めに歩くと、またも足を引きずる羽目に。整形外科の先生に「もう高校生じゃないっちゃん階段のぼりとかせんとよ。エレベーターば使うと！」と、ヒアルロン酸を注射されました。

今年は9月中旬の九州支部八ヶ岳連峰赤岳登山を目標に、春からトレーニングをしました。わたしは弱点多く、数年前は年3回も骨折(軽い)したし、登山ではスタミナと高山病が大きな課題でした。

高山病は、夏に木曾駒ヶ岳と同期会の西穂独標登山で、ダイヤモンドという薬を試してクリア。同期会登山では、「独標は岩場コワイから頂上までは行かない」とゴネるわたしを、同期のみんながなだめて、足の置き方やトレッキングポールの使い方までレクチャーしながら、頂上まで連れて行ってくれたのでした。ありがたや。

山でのスタミナは、とにかく低山でいいから頻繁に登るのが、ジムやウォーキングよりもいい、と聞いて納得。5月からは週1回は近隣の山に登ることにしました。決めたからには実行しないと負けたことになる、なんて半ば強迫めいた感じで、8月の猛暑の中でも毎週実行。同行してくれた赤岳登山リーダーはじめメンバーの皆さんに感謝です。

赤岳登山直前、これが最後のトレ登山と、一人で近くの飯盛山へ。気合満々、汗だくで急登を登り、これで万全と自己満足して帰宅後、左足に違和感が。思えばこれが膝痛の発端でした。

まあ気にしないでと、赤岳登山本番。これは素晴らしくて感動のうちに無事に下山できました。これで今年の最大の目標達成!! ありがたや。

ここまでは良かったのですが、それから1週間後、友達と長期の旅行で歩き回ったら、このへんから変でした。歩くのは大好きでいつもならガンガン歩くのに、スピードが出ないし、なんとなく左足をかばう。歩きたくない感じ。

旅行から帰って数日後、左足は朝のウォーキングのときに痛かったけど、まあ大丈夫でしょと八方ヶ岳登山へ。とうとうピキッとなくなってしまったわけです。

それから2週間後、歩いてみてもひどい痛みは出なくなったからと、膝不調のまま東京総会に参加。足を引きずる姿を見て、わたしの荷物を持って歩いてくださったみなさま。「大丈夫。必ず良くなるから」と励ましてくださった先輩。膝痛時の歩行の仕方をていねいに教えてくれた膝痛の師匠。みなさん本当に優しくしてくださいまして、ありがとうございました。ただただ感謝するばかりです。

今は痛みもほとんどなくなって歩けるようになり、1月予定のNZトレッキングに向けてリハビリ的トレーニングに励んでいます。

それにしても、今年はワングルOB会の人たちにたくさん支えられました。どちらかというと個人行動が多い自分ですが、人のあたたかさを十二分に感じ取った一年です。

わたしもいつか人を助けることができる自分になりたいです。

今年のOB総会は東京支部主催であり、幹事が諸準備をしてくれホテルも貸し切りとの事で、人数確保のためにもとの思いで出席した。山大工業化学のクラス会もこの日時に開催予定だったが、クラス会幹事の私から幹事会にワングルOB総会と重なり、私以外同期2名もいるのでと交渉し1週間ずらして頂いた。

2年振りの参加であり、総会、懇親会、二次会、三次会？と全て出席し、先輩、同期、後輩の皆様と楽しい会話をさせて頂き、アルコールも多くいただいたので何を話し、誰と話したのか記憶があまりない。

今回の参加には皆様との懇親も勿論の事だったが、もう一つの目的があった。総会参加前に鳳凰8月号をゆっくりと読み返していたら、竹久夢二のエッセイがあり夢二は15歳のとき福岡県八幡市に引っ越しており、著者S氏が「八幡はわたしのふるさと」と記載していた。私も「八幡はわたしのふるさと」なのです。現在は当時の5市が合併して北九州市となっており、八幡西区、八幡東区、小倉北区、小倉南区となり7区の構成となっている。

2日目はDプラン（御嶽渓谷散策）に参加した。参加メンバーにS氏がいたので歩きながら話しかけた。先ずは夢二の記事の事から始め八幡の事へ、そして出身高校を聞くとなんと私と同じ八幡中央高校ではないか。彼は経済学部の後輩だったので、当時は工学部とはなかなか接触もなく高校同窓生でもわからなかった。高校の東京支部同窓会もあるが、S氏は殆ど参加していないとの事。また東京支部で一緒ではあり時々会ってはいたがそんなに親しく話してはいなかった。彼は2年後輩なので私が3年生時に彼は1年生なので1年間は同じ校舎で過ごしていたことになる。

「ふ〜ん。ところで中学はどこ？」 「陣山中学です。」 「えっ？」

「小学校はどこ？」 「陣山小学校です。」 「なに？」

「幼稚園は？」 「成松幼稚園です。」 「ほんとう？」

「その時の住所は？」 「清納町2丁目です。」 「うそ？」

なんとS氏は幼稚園から大学まで一緒であり、私の家と50mも離れていない所に住んでいたのであった。こんな事あるのかな？ 偶然？ 奇跡？

澤乃井園での後、同期前田氏、小田氏、S氏と一緒に青海駅前のラーメン屋にて一杯飲みながら歓談食事をしたが、私とS氏は八幡の近況等でさらに盛り上がった。彼の実家菩提寺住職は私の同期が務めており、妻実家の菩提寺でもあり8月に義母の法事をしたばかりであったし、また住職弟は彼の同期でもあった。

さて下記写真のどなたか



PS: 鳳凰8月号中国西安旅行に記載した毎日文化センター講座が11月にあり、その後に先生と受講者で近くのピアホールにて夕食をした。そのメンバーのひとり上妻氏がなんとS47山口大学経済学部卒との事。またまた驚愕である。

迷走し、ゆっくり進んだ台風10号のため、3回計画を変更し、孫娘、娘、不治の病の女房と一緒に、江戸時代・宝永4年(1707年)に富士山の中腹が噴火して形成された宝永山への登山を決行した。

2024年9月3日(火)新幹線こだま719号東京10:57発に乗車し、娘手作りの弁当で昼食。12:03新富士駅着。富士急バス12:20発、途中、富士山本宮浅間大社でトイレ休息。



13:07 富士山本宮浅間大社

14:30、富士宮口五合目・2380mに着。小雨が降っており、孫と娘は雨がっぱ、筆者と女房はセパレート型レインコートを着た。女房には筆者が9年前に四国八十八か所霊場1200kmを一気に巡礼したときの金剛杖(南無大師遍照金剛)

を弘法大師と一緒に持たせた。14:58登山開始。小雨の下に風はほとんどなく、富士山山頂を仰ぎ見ることも出来た。



14:57 富士登山案内板を背にして

15:54、六合目2490mに到着。宿泊予約している雲海荘に入る。寝る所は4名用となっており、カーテンで仕切られている。17:30、カレーライス



15:31 富士山頂(左方)を望む

の夕食。ところが、孫は少し食べたかと思うと嘔吐。高山病の症状。小雨で寒い中を上ったためだろうか。筆者が前もって、高所のため低酸素濃度なので、空気を大きく吸うように伝えたが、やっていないのだろう。寝床に横たわって休み、21:00消灯。悪いことは続き、女房がトイレの場所がわからず、何度も筆者も起きて連れて行った。また、さらに



15:49 孫・娘(左側)と雲海荘・宝永山荘(右側)



15:59 雲海荘からの光景(駿河湾と三保の松原)

悪いことには何回も小屋の外に出て行く。その都度、筆者も起きて連れ帰したため寝不足気味。前日の自宅では調子よく眠ったのに、よりによって山小屋でこんなことになるとは。



17:39 雲海荘で夕食

9月4日(水)7:00過ぎに起床。前日の夕食のときに手渡された山小屋の弁当と今朝調理された暖かい味噌汁・お茶で朝食をした。ところが、孫は少し食べると嘔吐。下山することに。9月10日まで運行する富士宮口五合目発のバスは2本しかないが、10:00発のバスに十分間に合うのでゆっくり下ろうと娘に言い、また低いところの下るほど、どんどん高山病は治っていくと伝えた。すると、娘はリュックを背負い孫を抱っこして、どんどん下る。



7:28 山小屋から遠方の越前岳・愛鷹山を望む



7:29 目指した宝永山(中央)を望む

孫は幼稚園の年中組で身長が2番目に高く、女の子では最も高いので随分と重いはず。これぞ、母は強し。筆者と女房も無事五合目に下山。五合目10:00発、新富士駅11:47着。駅舎内の海鮮料理店で昼食、筆者は中瓶ビール1本も。新幹線こだまに乗車して東京駅へ。

本年度OB総会の2日目はDプラン（御嶽溪谷散策）に参加した。宿泊施設おくたま路を出てからJR御嶽駅まで電車、そこから出発した。天気も良く多摩川を見ながらカヌー、ラフティング大会も開催されており、楽しく歓談しながらの約30分の散策であった。途中民家の花壇にて美しい花も鑑賞して澤乃井清流ガーデンで解散となった。ガーデンで昼食・飲酒予定だったが、当日は小澤酒造の蔵開きで多数の観光客がいて食事をする場所が無く、数人で楓橋付近にてビールや日本酒を飲みながらの立ち話となった。

橋の近くに寒山寺があり寄りてみようかと思っていたら、30代男性が鐘堂から道へと落下した。酔っていたらしく額には血がにじみ出ており意識は朦朧、同行の女性はオロオロして何も出来ない状況だった。我々仲間が駆け寄り声をかけたり、小田氏が119番通報したりして対応していたら、若い男性が駆けつけリュックサックを枕にしたりして丁寧に介抱してくれた。小田氏によると119番はなかなか通じないので、110番通報したら、119番に根気よく電話してくださいとの事。その後男性は意識がしっかりし、女性と二人して青梅街道近くの救急車が来れる広場へ移動した。我々はその若い男性に「君は本日良い事をしたから将来きっと良い事があるよ」と言って乾杯した。その後我々も沢井駅へ行く途中の広場へ移動していると、警官が楓橋の方へ行こうとしたので、塩塚氏が怪我した方はその広場にいますとアドバイスした。近くの交番から駆け付けたのだろう。塩塚氏が話をしなければ、楓橋付近に該当する人がいなくて捜索に苦労したと思われる。駅に着くころ救急車のサイレンがやっと聞こえてきた。地方だと救急車が来るのに時間がかかるなと感じた。なおこの事故には後日談もあるのだが紙面の関係上省略。

その後青海駅のラーメン屋にて小田氏、塩塚氏、前田氏と一杯飲みながら食事となり、「今日は良い事をした、我々のも良い子があるように」と言って乾杯した。私は何もせずただ見ていただけだが、爽やかな気分を味わって頂いた。



寒山寺鐘堂



寒山寺説明文



楓橋

PS

中国蘇州にある寒山寺には25、6年前の初めての中国旅行、上海、南京、無錫、蘇州の旅行時に寄り、鐘も突きました。楓橋は下記の漢詩から採用したのかな？
唐時代の有名な漢詩 楓橋夜泊 張継作 があります。

月落烏啼霜滿天 江楓漁火對愁眠 姑蘇城外寒山寺 夜半鐘聲到客船
またの機会に奥多摩の寒山寺に寄りたいたいです。

（青梅観光協会パンフより）

寒山寺は中国の蘇州にある寒山寺にちなんでいます。書家の田口米舩が明治18年（1885年）に中国の姑蘇城外の寒山寺を訪れた際、主僧の祖信師より釈迦仏木1体を託されました。帰国後、昭和5年（1930年）に小澤太平氏の協力によってここに寒山寺が建立されました。御岳溪谷の遊歩道沿いにひっそりと佇むお堂には、溪谷を散策に訪れた人々が立寄り、鐘をつく姿を見かけます。

5歳の孫娘と娘、それに不治の病の女房と一緒に、千葉県房総半島のほぼ中央に位置する養老溪谷の栗又の滝すぐ近くの旅館・滝見苑に1泊し、納涼を楽しんだ。

2024年7月22日(月) JR内房線五井駅から小湊鉄道に乗り継ぎ、11:18 養老溪谷駅下車。滝見苑の迎車に乗り、15分で滝見苑に着。バス停・栗又の滝から坂を下り、養老川に架かるコンクリートの飛び石を渡り、滝めぐり遊歩道の木陰にビニールシートを広げて敷いた。娘と孫はすぐに水着に着替え、養老川の冷たい流れに入り水遊びをする。筆者も海水パンツに着替えたが泳げるほど深い所はないので、眺めているだけ。女房はシートに座って眺めている。

栗又の滝は落差約30m、幅約30mで、延長約100mあり、流れは傾斜の地面に沿って穏やかに流れている。また、砂岩や凝灰岩が柔らかく浸食され、砂岩が削られて滝が形成されたという。

かなりの人達が見える滝壺の近くに行くには、遊歩道の右側にある大きな岩が折り重なっているところをなんとか通り、滝壺右側の岸辺にたどり着いた。すぐに、孫は浮き輪を持って、浅いところで娘と一緒に泳ぐ。標識板に滝壺は2mの深さがある



12:48 栗又の滝



13:10 娘が孫に泳いで見せる

あると書いてある。なるほど、滝壺間近の深いところは濃い緑色、浅いところは薄黄色の水面となっていた。栗又の滝での遊泳を堪能して、木陰のシートに帰ると女房は昼寝をしていた様子。通りかかった方に、栗又の滝を背にして4名揃った記念写真のシャッターを押してもらった。孫は娘持参のスルメイカを結んだ筆者持参のたこ紐を割り箸に付け、魚釣りをする。何を釣ろうとするのか。サワガニでもおれば釣れるのだが。

滝見苑・秘湯の宿に行く。部屋は4階の和室。早速3階の温泉に、展望露天風呂長寿の湯、化石風呂に入浴。夕食は養老川で釣れた鮎などが食卓に並べられ豪華。筆者は生ビールと酎ハイも。娘はグラス梅酒。女房はグラスワイン。夕食後、子供同伴者には花火が提供されており、孫が楽しんだ。



13:41 栗又の滝納涼記念写真/右遠方が栗又の滝



18:25 豪華な夕食の様子

7月23日(火) 筆者はせっかくの温泉なので朝風呂。前日は気付かなかったが、浴場を出たところに、コッパウニの化石が展示されていた。この化石は滝見苑新築基礎工事の時に出土したもので、今から1億5千年前に4000mの深海に生息していたと思われるとのこと。朝食も豪華。ご飯は釜炊き、また生卵と牛乳を希望すればもらえるとのこと、筆者は牛乳と卵2個を頂いた。ゆっくりでよいとチェックアウト10:00に滝見苑を出て、前日と同じ遊歩道の木陰にビニールシートを広げる。女房は寝転んでおり、孫と娘は前日と同じ流れの中で遊んだ。また、30~40名位だろうか多くの小学生が3名の初老の人に引率されてきて、危ないから滝の方には行かず、ここで水遊びをすることと叫んだ。孫も一緒に遊ぶ・泳ぐ。



6:29 コッパウニの化石



12:15 浮き輪を付けて泳ぐよ

9. OB の皆さまへのお願い

(1) OB会費の納入について

会費有効年を経過して会費未納の場合は自然脱会となりますので、会費の支払いはお忘れなきようお願い申し上げます。脱会になりますと、以後OB通信の発送等OB会からの連絡が途絶えることとなりますのでご注意ください。

会費有効年は、皆さまの宛名書きに記載していますが、今一度会費有効年を確認され、もし、相違している場合は、会長または事務局までお問い合わせ願います。

【OB会費の納入状況についての問い合わせ先】

次頁・会長宛お問い合わせ下さい。

会費有効年に応じて、鳳翔会新規(再)加入のご案内、会費納入について(お願い)、お知らせ、入会申込書、会則、郵便局払込取扱票を同封しています。新規(再)加入及び入会を継続される場合は、お手数ですが、同封の郵便局払込取扱票にて下記へ納入くださいますようお願いいたします。同封文書は次のようになっていますのでご確認ください。

ア 新規加入の皆さま及びOB会費未納のため2023年までに会員資格を喪失された皆さま

鳳翔会新規(再)加入のご案内、入会申込書、会則、郵便局払込取扱票

新規(再)加入を希望される場合は、郵便局振込とともに、入会申込書を送付いただくか、必要事項を会長宛てメールにてご連絡ください。

【送付先】

郵便番号753-0841 住所 山口県山口市吉田1677-1 山口大学体育会内
宛先 山口大学ワンダーフォーゲル部

イ 会費有効年が2024年の皆さま

会費納入について(お願い)、郵便局払込取扱票

口座記号番号 01530-0-16050

加入者 山口大学ワンダーフォーゲル部鳳翔会

個人会員年会費 2,000円(夫婦会員年会費 3,000円)

※年会費は、複数年分を一括納入することもできます。一括納入の場合は振込金額を単年会費の複数年倍としてください。個人会員の場合、年会費を1,000円の端数で納入されないようお願いいたします。

新規または再度会費を納入される場合は、会費の有効年は納入年からとして取り扱い致します。

(2) OB通信の送付について

OB通信は本来会員の皆さまだけに送付することになっています。

(3) OB通信・鳳翔会HPへの寄稿について

事務局では、皆さまからのOB通信の寄稿を常時受け付けています。掲載を希望される場合は、会長宛原稿を提出ください。なお、OB通信の発行の準備の都合上、原稿の提出期限は次のとおり願います。鳳翔会HPは随時受付ます。なお、OB通信の内容等についてご意見がありましたら、会長までお寄せ下さい。

(4) 転居先連絡のお願いについて

OBの皆さまの住所確認については万全を期していますが、OB通信の発送の都度、数通が転居先不明で返送されてきます。その後、お知り合いの方に転居先を確認し再送していますが、OB通信の送付が遅れる原因になっています。転勤等で住所を移転された場合は、速やかに会長までご連絡願います。

同期世話人の方には同期の方の住所変更の連絡をお願いしています。同期世話人の一部の方でメールが不通となっています。メールアドレスの変更がありましたら同様に会長までご連絡ください。

10. 2024年度 本部・支部役員連絡先

【本部】

・鳳翔会会長

田村 伊正（工・昭和53年卒）

〒758-00525 山口県萩市土原63-3

携帯 090-3177-3876（家電0838-25-5775）

E-mail tamurako@kyouwagrp.jp

・鳳翔会副会長

三國 彰（工・昭和55年卒）

田原 宏（工・昭和57年卒）

・鳳翔会幹事

田中 秀平（農・昭和47年卒） 石川 忠（教・昭和49年卒）

古谷 眞之助（経・昭和52年卒） 坂田 信一（理・昭和57年卒）

浅野 哲郎（工・昭和61年卒） 齊藤 昌彦（農・昭和60年卒）兼会計担当

・鳳翔会事務局長

木村 幸誠（経済学部・4回生）

連絡先〒753-0841 山口県山口市吉田1677-1 山口大学体育会内ワンダーフォーゲル部

・鳳翔会会計監査

平野 展康（経・昭和59年卒） 日野 耕二（経・昭和58年卒）

【東京支部】

支部長 城戸 賢嗣（経・昭和49年卒）

副支部長 高田 哲生（工・昭和49年卒）

事務局長 秋山 高弘（経・昭和53年卒）

【関西支部】

支部長 池田 純（工・昭和51年卒）

【山口支部】

支部長 坂田 信一（理・昭和57年卒）

支部幹事 平野 展康（経・昭和59年卒）

支部幹事 川地 翔子（農・平成26年卒）

【九州支部】

名誉支部長 永沼 嗣朗（経・昭和39年卒）

支部長 堀 剛（経・昭和57年卒）

事務局長 天野 雅紀（経・昭和61年卒）

【編集後記】

今回は原稿が例年より少なかったため、追加募集でご迷惑をおかけしましたが、無事に原稿も集まりました。投稿していただきました会員の皆さまありがとうございました。 編集長 田原 宏

